

いぼ

新美南吉

青空文庫



に皆さんの松吉と、弟の杉作と、年もひとつちがいでしたが、たいへんよくにっていました。おでこの頭が顔のわりに大きく、わらうと、ひたいにさるのようにならうと、走るとき、両方の手をひらいてしまふところも同じでした。

「ふたり、ちつとも、ちがわないね。」

と、よく人がいいました。そうすると、にさんの松吉が、口をとがらして、虫くい歯のかけたところからつばをふきとばしながら、いうのでした。

「ちがうよ。おれにはふたつもいぼがあるぞ。杉にやひとつもなしだ。」

そういって、右手の骨ばつたにぎりこぶしを出して見せました。見ると、なるほど、親指と人さし指のさかいのところに、一センチぐらいはなれて、小さいいぼがふたつありました。

この兄弟の家へ、町から、いとこの克巳が遊びにきたのは、きよ年の夏休みのことでした。克巳は、松吉と同一年の、小学校五年生でした。

克巳は五年生でも、からだは小さく、四年生の杉作とならんでも、まだ五センチぐらい低かったが、こせこせとよく動きまわる子で、松吉、杉作の家へくるとじき、はつかねずみというあだ名をつけられてしまいました。

松吉、杉作の家のうらてには、ふたかかえもあるニツケイの大木がありました。その木の皮を石でたたきつぶすと、いいにおいがしたので、おとなたちが、昼ねをしている昼さがりなど、三人で、まるできつつきのように、木のみきをコツコツとたたいていたりしました。

また、あるときは、おじいさんの耳の中に、毛がはえていることを克巳が見つけて、

「わはア、おじいさんの耳、毛がはえている。」

とはやしたてたことがあります。松吉、杉作は、もうずっとまえから、そんなことは知っていました。が、あまり、克巳がおもしろそうにはやしたてるので、いっしょになつてこれも、

「わはい、おじいさんの耳、毛がはえている。」

と、はやしたてたものでした。すると、おじいさんが、松吉、杉作をにらみつけて、

「なんだ、きさまたちや。おじいさんの耳に、毛のはえとることくれえ、毎日見て、よく

知ってけつかるくせに。」

と、しかりとばしました。そんなこともありました。

克巳はからうすをめずらしがつて、米をつかせてくれとせがみました。しかし、二十ばかり足をふむと、もういやになって、おりてしまいましたので、あとは、松吉と杉作がしなければなりませんでした。

あしたは克巳が、町へ帰るといふ日の昼さがりには、三人でたらいをかついで裏山うらの絹池ぬいけにいきました。絹池は、大きいというほどの池ではありませんが、底知れず深いのと、水がすんでいてつめたいのと、村から遠いのとで、村の子どもたちも、遊びにいかない池でした。三人は、その池をたらいにすがつて、南から北に横ぎろうというのでした。

三人は南の堤防ていぼうにたどりついてみますと、東、北、西の三方を山でかこまれた池は、それらの山と、まっ白な雲をうかべているばかりで、あたりには、人のけはいがまるでありません。三人はもう、すこしぶきみに感じました。しかし、せつかくここまでたらいをかついできて、水にはいりもせず帰つては、あまり、いくじのない話ではありませんか。三人は勇氣ゆうきを出して、はだかになりました。そして、土手どての下のよしの中へ、おそるおそる、たらいをおろしてやりました。

たらいが、バチャンといました。その音が、あたりの山一面に聞こえたらうと思われ  
るほど、大きな音に聞こえました。たらいのところから、波の輪がひろがっていきま  
見ていると、池のいちばんむこうのはしまでひろがって行って、その小松のかげが、ゆ  
らりゆらりとゆれました。三人はすこし、元気が出てきました。

「はいるぞ。」

と、松吉が、うしろを見ていいました。

「うん。」

と、克巳かつみがうなずきました。

三人のはだかん坊ぼうは、ずぼりずぼりと水の中にすべりこみ、たらいのふちにつかまりま  
した。そして、うふふふと、おたがいに顔を見合わせてわらいました。おかしいので  
わらったのか、あまりつめたかったのでわらったのか、じぶんたちにもよくわかりませ  
でした。

もう、こうなつては、じつとしているわけには、いきません。三人は足を動かし  
はじめのうちは、調子ちようしがそろわないので、ひとつとこであばれているばかりで  
が、そのうちに、三人は同じ方へ水をけりました。たらいは、すこしずつ、池の中心にむ

かつて、進みはじめました。

長い時間がたちました。

三人はへとへとになりました。もう足を動かすのがいやになりました。さて、三人は、どこまでできたのでしょうか。じぶんたちの位置いぢを見て、三人はびっくりしました。いまちやうど、池のまん中ちゆうちゆうにいるではありませんか。

まわりの山で、せみは鳴きたてています。気ばかりあせります。しかし、からだはもう動きません。

「もう、おれ、およげん。」

と弟の杉作が、なきだすまえのわらい顔でいいました。

松吉も、なきたい気持ちでした。だまって目をつむりました。

「ぼくも、もう、だめや。」

と、克巳かつみもいいました。

松吉は目をひらくと、きつぱり、

「もどろう、そろそろいこう。」

と、いいました。

そして、たらいを、ぎやくの方向に、ぐいとひとつおしました。

杉作も克巳も、だまっています。しかし、松吉についていくより、しかたがありませんでした。つかれきつたふたりの顔に、かすかにわきあがる力の色が見えました。

たらいは、動いていくようには思えませんでした。いつまでたっても、もとの土手どてに帰りつくことは、できないように見えました。

三人は、ときどき、ちつとも近くなならない土手の方に、ちらつちらつと、絶望ぜっぼうしたような目をなげました。

そのとき、松吉の口をついて、

「よいとまアけ。」

という、かけ声がとび出しました。

よいとまけ——それは、いなかの人たちが、家をたてるまえ、地がためをするとき、重い大きいつちを、上げおろしするのに力をあわせるため、声をあわせてとなえる音頭おんどです。それはいなかのことばです。町の子どもである克巳かつみに聞かれるのは、はずかしいことばです。しかし、いまは、松吉は、はずかしくもなんとありません。必死ひっしでした。

「よいとまアけ。」



と、水をけつて、また松吉はいいました。

すると、弟の杉作がなき声で、

「よいとまアけ。」

と、<sup>おう</sup>応じました。杉作も必死<sup>ひっし</sup>でした。

「よいとまアけ。」

松吉は、声をはりあげました。

するとこんどは、杉作ばかりでなく、克巳<sup>かつみ</sup>までがいつしよに、

「よいとまアけ。」

と、<sup>おう</sup>応じました。

克巳もまた、必死だったのです。

三人とも必死でした。必死である人間の気持ちほど、しっくり結びあうものはありません。

松吉は、じぶんたち三人の気持ち、ひとつのこぶしの形に、しつかり、にぎりかためられたように感じました。そうすると、いままでの百倍もの力が、ぐんぐんわいてきました。

「よいとまアけ。」

と、松吉。

「よいとまアけ。」

と、杉作と克巳。

きゆうに、たらいが、速くなったように思われました。もう土手<sup>どて</sup>は、すぐそこでした。そら、もう、よしの一本が、たらいにさわりました。

克巳は、いなかの松吉、杉作の家に十日ばかりいたのですが、最後のこの日ほど、三人がこころの中で、なかよしになったことはありませんでした。

池から家へ帰つてくると、三人はこころもからだも、くたくたにつかれてしまったので、ふじだなの下の縁<sup>えんだい</sup>台に、おなかをぺこんとへこませて、腰<sup>こし</sup>かけていました。

そのとき克巳<sup>かつみ</sup>は、松吉の右手をなでていましたが、

「いぼって、どうするとできる？ ぼくもほしいな。」

と、わらいながらいいました。

「ひとつ、あげよか。」

と、松吉はいいました。

「くれる？」

と、克巳はびっくりして、目を大きくしました。

松吉は、家の中から、箸はしを一本持つてきました。

「どこへほしい。」

「ここや。」

克巳は信じないもののように、クツクツわらいながら、左の二の腕うでを、うえぼうそうし  
てもらうときのように出しました。

松吉の右手の一つのいぼと、克巳の腕とに、箸がわたされました。

松吉は、大まじめな顔をしました。そして、天のほうを見ながら、

「いぼ、いぼ、わたれ。」

いぼ、いぼ、わたれ。」

と、よく意味のわかるじゆもんをとなえました。

そのよく日、町の子の克巳かつみは、なすや、きゅうりや、すいかを、どっさりおみやげにも  
らって、町の家に戻っていったのでした。

## 二

牛部屋べやのかけで、さざんかが白くさくころに、松吉、杉作のうちでは、あんころ餅もちをつくりました。農揚のうあげといつて、この秋のとり入れと、お米ごしらえがすっかり終わったお祝いに、どこの百姓ひやくしやうや家でもそうするのです。

松吉と杉作が、土曜の午後に、学校から帰つてくると、そのお餅を、町まちの克巳かつしの家にくばつていくことになりました。これはもうきのう、お餅をつくつておいたときから、ふたりがおかあさんにたのんで、かたく約束しておいたことです。

なぜなら、このことには、ふたつのよいことがありました。ひとつは、夏休みになかよしになつたいとこの克巳かつしに会えるということ、もうひとつは、あまりはつきりいたくないのですが、おだちんをもらえることです。そしてまた、町のおじさんおばさんは、いなかの人のように、お銭かねのことではケチケチしません。いつも五十銭ごじゅうせんぐらい、おだちんをくれたのです。

おかあさんが、お餅のはいった重箱じゆうばこを、風呂敷ふろしきにつつんでいるとき、松吉は、「ねえ、おつかさん、電車に乗つてつても、ええかん。」

と鼻にかかる声で、ねだりました。

「なんや？ 電車や？ あんな近いとこまで、歩いていけんようなもんなら、もうたのまんで、やめておいてくよや。おとつつあんに自転車でひと走りいつてきてもらや、すむことだで。」

「うふん。」

と、松吉は鼻をならしました。しかし、帰りはもらったおだちんで、電車に乗ることができると思つて、わずかに心をなぐさめました。

松吉と杉作は、ぼうしをかむらないで家を出ました。ぼうしをかむって町へいくと、町の子どもが徽章きしょうを見て、松吉、杉作がいなかからきたことを、さどるにちがいありません。それが、ふたりはいやだったのです。

ふたりが八幡はちまんさまの石鳥居の前を通りかかると、そこで、こまを持って、ひとりですよぼんとしていたけん坊けんぼうが、

「杉、どこへいくで、遊ぼかよ。」

と、声をかけました。

杉作は、

「おれたち、町へいくんだもん。」

と、いいました。そしてふたりは、新しい幸福にむかって進んでいく人のように、わき目もふらないですぎていきました。

けん坊ぼは、はねとぼされた子ねこのような顔をして、ふたりを見送っていました。

村を出てしまったところに、松吉は、じぶんの右手がいたんでいることに、気がつきました。見ると、重箱じゅうばこが右手に持たれているのでした。

ちようど、うまいぐあいに、一メートルぐらいの竹切れが、道ばたに落ちていました。

ふたりはその竹を、風呂敷ふろしきの結びめの下に通して、ふたりでさげていくことにしました。

弟の杉作が先になり、兄の松吉があとになりました。こうしてふたりで持てば、重箱じゅうばこはたいそう軽いのでした。うまいぐあいでした。

ふたりはしばらく、だまつていきました。松吉はほんやりと、考えはじめました——五十銭くれると。五十銭もくれるだろうか。でもおばさんは、きよ年もそのまえも五十銭くれたから、ことしだつて、くれるだろう。五十銭くれると、それでなにを買おうか。模型もけい飛行機ひこうきの材料——あの米屋の東一君あづまが持っているようなのは、いくらするだろう。五十銭では買えないかな。それとも、雑誌ざっしを買おうかな。弟は、なにがいいというかしらん

……。

松吉の、とりとめのない夢は、とつぜん、

「どかアーン！」

という、とてつもない音で、ぶちやぶられました。松吉はきもをつぶして、あやうく、持っていた竹を、はなしてしまふところでした。

そんな声をだしたのは、すぐ前を歩いている弟の杉作でした。杉作であることがわかると、松吉ははらがたつてきました。

「なんだア、あんなばかみてな声をだして。」

すると杉作は、うしろも見ないで、こういうのでした。

「あつこの木のでつぺんに、とんびがとまったもんだん、大砲たいほうを一発うっただげや。」

それでは、しかたがありません。

また、しばらくふたりはだまつていきました。

また松吉は、考えはじめました——克巳かつみはきよう、うちにいるだろうか。おれたちの顔を見たら、どんなに喜ぶだろう。いぼはうまく、腕うでについたらうか。おれのいぼは、ひとつ消えてしまつただけ。

松吉は、じぶんの右手をそつと見ました。

三

町にはいると、ふたりは、じぶんたちが、きゆうにみすぼらしくなってしまったように思えました。

これでは、ぼうしの徽章きしやうを見なくても、山家やまがから出てきたことがわかるでしょう。第一、町の人は、こんなふうたましに、魂たましいをぬかれたように、きよろんきよろんとあたりを見ていたり、荷馬車にぶつかりそうになつて、どなりつけられたりはしません。ところが、このきよろんきよろんがふたりともやめられないのでした。

ふたりは、こころの中では、ひとつの不安を感じていました。それは、町の子どもにかまつて、いじめられやしないか、ということでした。だから、ふたりはこころをはりつめ、びくびくし、なるべく、子どものいないようなところをえらんでいきました。

同盟書林どうめいしよりんという、大きい本屋の前を通りすぎて、すこしいつてから、東へはいるせまい路地ろじなかに、克巳の家がありました。そこで、同盟書林どうめいしよりんをすぎると、ふたりは、



首をがちょうのようのぼして、どんな細い路地ものぞきこみました。道もない、ただ家と家のあいだになつているところまで、のぞきこみました。

そのうちに、杉作が、

「あつ、ここだ。」

と、落とした財布でも見つけたように、さげびました。なるほど、その小路のなかほどに、紅と白のねじ餡の形をした、床屋の看板が見えました。——克巳の家は床屋さんでした。

ふたりは、幸運のしつぽを、たしかにつかんだ人のように、あわてずに、進んでいきました。竹切れは、ぬいてすてました。重箱は松吉が持ちました。松吉は口の中で、むこうでいうように、おかあさんから教えられてきたことを、復習しました。

店の前までくると、入口のすりガラスの戸の前には、冬の午後の、かじかんだ日ざしをうけて、ひとつひとつの葉の先に、とげのあるらの小さい鉢がふたつおいてありました。らの根もとには卵のからがふせてあつて、それに道のほこりがつもつて、うそ寒いように見えました。しかし、店の中は、すりガラスでよくは見えませんが、あたたかそうな湯気がたっています。そこには、やさしいおばさんおじさん、なつかしい克巳がいるの

です。

重いガラス戸をあけて中へはいりますと、おじさんがひとり、たたみのしいてあるところに、あおむけにひっくり返つて、新聞を読んでいます。こちらの方では、まるい銀の頭を、ぴかぴかにみがきあげられたタオルむしが、ひとりで、ジューン、ジューンと湯気をふいていました。

おじさんは新聞を読みながら、うとうととしていたらしく、しばらくそのままにいました。が、やがて、人のけはいにおどろいて、ガバツと新聞をはねのけ、起きあがりました。それを見て、ふたりはびっくりしました。おじさんではなかったのです。

それはふたりの村の、かじ屋の三男の小平<sup>こへい</sup>さんでした。小平さんは、そのまえの年の春ごろ、学校を卒業しました。そういえばいつか小平さんが町の床屋<sup>とこや</sup>さんへ、小僧<sup>こぞう</sup>にいったということを、聞いたような気がします。

ふたりは、つくづくと小平さんの顔とすがたを、うちながめました。

小平さんはなんとなく、おとなくさくなりました。色が白くなり、あごのあたりがこえてきたようでした。頭も床屋<sup>とこや</sup>にきたからでしょうが、四角なかつこうに、きれいにかりこんでいます。もことから、あまり口をきかないで、目を細くして、にこにこしていました。

そのくせ、人のうしろから、よくいたずらをしました。

いちど、松吉は、耳の中へあずきを入れられて、こまったことがありました。ああいうことを、小平さんは、今でもおぼえてるかしらん、忘れてしまったかしらん——ともかく、いまも小平さんは、白いうわっぱりのポケットに両手を入れて、ふたりを見ながら、にこにこしています。

小平さんは、きょうは親方もおかみさんも、金光教のなんとやらへいつていない、克巳ちゃんもまだ学校から帰ってこない、といいました。

ふたりは、ちよつと失望しました。

「だが、まだ三時だから、もうちよつと待つておれよ。そのうちに、おかみさんが帰つておいでるかもしれない。」

と、小平さんがいいました。

そこでまた、希望がわきました。ふたりは、あがりはなに、目白おしにならんで、腰をかけた。

小平さんは、ともかく、お餅をいただいておこうといつて、おくへはいつていき、カタコンと音をさせていましたが、やがて、からの重箱を、また風呂敷につつんで出

てきました。松吉はそれをうけとつて、ひざの横におきました。

あれから、五分たちました。まだ、おばさんは帰ってきません。おじさんも克巳かつみも、帰ってきません。松吉、杉作はいつしよに、小さいためいきをつきました。

小平さんは、ふたりの頭を見ていましたが、

「だいぶ、のびとるな、ひとつ、だちんのかわりに、かってやろか。」  
と、いいました。

ふたりは顔を見あわせて、クスリとわらいました。

松吉も杉作も、生まれてからまだ一ども、床屋とこやでかみをかけてもらつたことはありませんでした。いつもふたりのかみをかつたのは、おとうさんか、おかあさんの手ににぎられたバリカンでした。そのバリカンは、もう五、六年まえから、ひどく調ちようし子が悪く、ときどき、ぐわツと大きくかみついて、とることもどうすることもできなくなってしまうようなしまつでしたので、ふたりは、家をかみをかることを、あまり好んではいませんでした。ふたりは、目の前にある、りっぱな腰かけを見ました。白いせとものひじかけがついています。おしりののるところは、黒い皮ではつてあります。もたれるところも、黒い皮です。その上に、小さいまくらのようなものまで、ついています。下の方は、足をのせる

かねの台があつて、それにはすかしぼりの模様もようがあります。このりっぱな腰こしかけに腰かけて、やつてもらうのです。ふたりはまた、なんとなく顔を見あわせました。

小平さんにうながされて、松吉と杉作は、先をゆずりあつて、おたがいにすみの方へひっこみあいをしました。が、とうとう、にいさんの松吉が、先にしてもらうことになりました。

松吉はこわごわ、りっぱな腰かけにのりました。ばかに高いところに、のぼったような気がしました。すぐ前の大きい鏡に、あまりにはつきり、じぶんのひょうたん顔がうつりましたので、はずかしくなりました。

小平さんは、まっ白な布で、松吉の首から下をつつんでしまいました。手も出ませんでした。

小平さんは、どこからバリカンをとり出してきました。バリカンは、家と同じもののように見えました。バリカンがさわったとき、松吉は思わず首をすくめました。このバリカンも、かみつくかと思つたのです。

ポロリと、白い布の上に落ちてきたものを見ると、かられた、黒い、じぶんのかみの毛でした。なアんだ、もうかられているのかと、思いました。ちつとも、いたくないではあ

りませんか。そこで松吉は、やっと安心して、かたの力をぬきました。

かみがかられてしまうと、松吉は、これでおしまいだと思いました。家ではいつでも、それだけだったからです。ところが、おどろいたことには、腰かけがキーイとかすかな音をたてて、うしろへたおれていきました。

「あッ。」

と、松吉は、声をたてました。しかし、腰かけはたおれたものではありませんでした。もたれだけが、うしろにのびて、腰かけている人があおむけにねるようになっただけでした。天じょうの白壁しろかべや、キャベツの玉のような形の大きい、すりガラスの電燈を見ていると、とつぜん、顔一面に、だツとなにかあついぬれたものをのせられて、目も見えなくなつてしまいました。見ていた杉作が、おかしかったのか、ハハハハ、とわらっています。

松吉もわらいたいのですが、顔がふさがっていて、わらうことができません。人間は、顔でわらうのだということが、よくわかりました。顔にのせられたのは、むしタオルでありました。

小平さんはタオルをのけると、太い筆のようなもので、せっけんのあわを松吉の顔にぬり、かみそりで、ひたいぎわからそりはじめました。

松吉はそのとき、小平さんがまだ子どもで村にいたころ、松吉たちによくいたずらをしたことを、また思い出しました。小平さんはよくうしろから、そつときて、人の背せなか中へ手を入れたり、わきの下をくすぐったりしました。そして、小さい目を細くして、にやにやわらっていました。

いまでも松吉は、小平さんが、そんないたずらを、はじめるのではないかと、おしりのおちつかぬ思いでした。ことに小平さんが、松吉の耳をつまんで、二どばかり、耳の毛をそつたときには、松吉は、てつきり、小平さんが、むかしのいたずらをはじめたと、思いました。もうすこしで、クツクツとわらいだすところでした。しかし、小平さんの顔を見ますと、まじめな顔をしていました。あそびをしているのではない、仕事をしているおとなの顔つきでありました。

松吉には、小平さんがおとなになったから、もうあそばないということがわかりました。おとなは仕事をするのです。たとえば、人の耳をつまんでそるといふような、いたずらみたいなことでも、小平さんは仕事ですから、まじめにするのです。松吉には、おとなになるというのは、ふざけるのをやめて、まじめになる約束のように思われました。なんとなく、さみしい感じがしました。

すみの洗面所で頭をあらい、もう一ぺん腰かけにもどり、顔に、ぬるぬるしたものをぬつてもらうと、松吉の番はすみました。こんどは、弟の杉作がかわつて、腰かけにのぼりました。

時計を見ると三時四十分でした。さつきは、入口のガラス戸の下までさしていた日ざしが、いまは、上の方に忘れられたように、ほんのすこしのこっているだけです。

と、そのとき、入口の戸をガラガラと乱暴にあけて、茶色のジャケツをきた少年が手さげかばんを持つてはいつてきました。

「ただいまア。」

克巳でした。

松吉と杉作は、一ぺんに生きかえりました。「克巳ちゃん。」ということばが、松吉ののどのところまで出てきました。しかし、そこで、とまってしまいました。克巳のあまりに町ふうなようすに対して、じぶんたちのいなくさが思い返されたのでした。

克巳は、最初に松吉と、それから杉作と顔をあわせました。しかし克巳の目は、知らない人を見るように冷淡でした。おれたちが、松吉、杉作なことが、まだ、わからないのかなど、松吉は思いました。歯がゆい感じでした。



克巳はながくは、そこにいませんでした。松吉のうしろの階段かいだんをのぼって、二階へ上がってしまいました。

でもまだ松吉は、望みをすてませんでした。克巳かつみは、ちよつとした用事を二階ですまして、いまにおりてくるだろう。そしておれたちと遊んでくれるだろうと、松吉は考えていました。

だが、克巳はさっぱりおりてきませんでした。

やがて、克巳の友だちらしいのがふたり、

「克巳くうん。」

といて、外から店にはいつてきました。

克巳は二階からおりてきました。

松吉は、胸むねがわくわくしました。こんどこそ克巳が、松吉たちになにかいってけると思ったのです。

しかし克巳は、松吉には目もくれませんでした。そして、ふたりの町の友だちを手まねきして、三人いっしょに、どやどやと二階へあがってしまいました。

松吉は、つき落とされたように感じました。じぶんの立っている大地が、白ちやけたさ

びしいものにかわってしまいました。

松吉にはわかりました。克巳にとつては、いなかで十日ばかりいっしょに遊んだ松吉や杉作は、なんでもありやしななんだと。町の克巳の生活には、いなかとちがって、いろいろなことがあるので、それがあたりまえのことなんだと。

#### 四

松吉と杉作は、町から村のほうへ、魂たましいのぬけたような顔をして歩いていきました。

からの重じゅうぼこ箱は、ズボンとポケットにつつこんだ松吉の右手に、だらしなくぶらさがり、ひと足ごとにおしりにぶつかります。

いくときの、希望きぼうにみちた心持ちにひきかえ、帰りの、なんという、まのぬけた、はぐらかされたような心持ちでしょう。

考えてみると、きょうは、あほくさいことでした。第一、克巳かつみに知らん顔をされました。第二に、だちんがもらえなかったので、帰りも電車に乗れませんでした。第三に、やはりだちんがもらえなかったので、雑誌ざっしや模型もけい飛行機ひこうきの材料ざいりょうを買う夢ゆめが、おじやんになってし

まいりました。

こうしてじぶんたちは、すつぽかさされて、青坊主ぼうずにされて帰るのだと思うと、松吉は、日ぐれの風がきゆうに、かりたての頭やえり首に、しみこむように感じられました。

「どかアん。」

と、杉作がとつぜん、どなりました。

また、とびかと思つて、松吉は見まわしましたが、それらしいものは、どこにも見あたりません。かれたクワ畑のむこうに、まっかな太陽が、今しずんでいくところでした。

「なにが、おるでえ。」

と、松吉は杉作にききました。

「なにも、おやしんけど、ただ大砲たいほうをうつてみただけ。」

と、杉作はいいました。

松吉は、弟の気持ち、手にとるようによくわかりました。弟も、じぶんのようさびしいのです。

そこで松吉も、

「どかアん。」

と、一発、大砲をうちました。

すると松吉は、こんな気がしました——きょうのように、人にすつぽかされるといふようなことは、これから先、いくらでもあるにちがいない。おれたちは、そんな悲しみになんべんあおうと、平気な顔で通りこしていけばいいんだ。

「どかアん。」

と、また杉作がうちました。

「どかアん。」

と、松吉はそれに応じました。

ふたりは、どかんどかんと大砲をぶつぽなしながら、だんだん心を明るくして、家の方へ帰っていききました。

## 青空文庫情報

底本：「童話集 こんぎつね―最後の胡弓ひき ほか十四編」講談社文庫、講談社

1972（昭和47）年2月15日第1刷発行

1988（昭和63）年1月30日第30刷発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

いぼ  
新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>